2009年8月2日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一6章13～21節
説教題：だれが聖なる神の前に立ちえよう

あらすじ

イスラエルとペリシテ人との間に二度にわたる戦いがありました。イスラエルは戦いに敗れ、モーセの時代から大切にしてきた神の契約の箱も奪われてしまいます。

ペリシテ人は、契約の箱があれば自分たちの運が上向いてくるだろうと考えました。ところが、自分たちの拝んでいたダゴンの像が倒れてバラバラになる事件が起きました。続いて町に疫病が発生し、人々が倒れていきました。次第に自分たちは何か大変なものを持ち込んだことに気がつきました。町のリーダであった領主たち五人が集まり、対策会議を開きました。そこに呼ばれた祭司と占い師はこのようにアドバイスします。「すぐに契約の箱をイスラエルに送り返しなさい。ただで返してはいけない。金のねずみの像を五つ造り、それを車に載せて返しなさい。」

車は二頭の雌牛に引かれ、ベテ・シェメシュの町にまっすぐに歩んでいきます。

1　ベテ・シェメシュの人々がしたこと

（1）見て喜んだ

季節は小麦の刈り入れ時でした。どこの家でも一家総出で収穫に汗を流していました。目を上げると、ペリシテ人の町からとことこと二頭の牛に引かれた車がやってきます。車の上には何とあの契約の箱が載ってある。彼らはそれを見て喜びました。

かつて、契約の箱が奪われたときのことを思い出します。祭司であるエリは、神の箱が奪われたという知らせを聞いた直後に、心を痛めながら死んでしまいました。エリのお嫁さんも子どもを産んだ直後に、「栄光がイスラエルから去った」と言い残し死んでいきます。神の契約の箱が奪われることはそれほどショッキングな出来事だったのです。

（2）全焼のいけにえをささげた

その箱が期せずして、自分たちのところに戻ってきました。町中の人々が集まり、歓声を上げてお祭り騒ぎとなります。すぐにレビ人たちが呼ばれました。レビ人とは、モーセの時代から幕屋とか契約の箱などそれらの管理をゆだねられた特別の人たちのことを言います。一般の人はみだりに契約の箱に触れることはできませんでした。ですから、レビ人たちが主の箱と金の品物の入った鞍袋を降ろして大きな石の上に置きます。

続いて、人々は契約の箱を載せてきた車をこわし、薪にします。そして車を引いてきた二頭の雌牛をその場で殺し全焼のいけにえとして、神にささげられました。

全焼のいけにえとは、罪を犯してしまった人間が神の怒りをなだめるためにささげるいけにえでした。罪を赦していただく手段として全焼のいけにえをささげる。また同時に、罪を赦された事への感謝として全焼のいけにえをささげる。そのような意味が込められています。

ベテ・シェメシュの人々がしていることを見ると、彼らは神の前に誠実な歩みをしてい

るように見えなくもありません。ところがこの後、大きな問題が起きてしまいます。いったいどうしてそんなことになってしまうのか。

そのことを見る前に、聖書はペリシテ人のことについて触れていますので、まずそのことから見ていきます。

2　ペリシテ人のしたこと

（1）償いとして主に返した

17、18 節には、ペリシテ人が返してきた金の腫物の像のことの説明が詳しく書かれています。17 節の最初に、「償いとして」とあります。神の契約の箱を、自分勝手な思いから奪ってしまったことを後悔し、その罪を償うために金の腫物の像、具体的にはねずみの形をした金の像を作ったのだと説明しています。イスラエルの財政を潤すためではありません。あくまでも主にお返しするということが目的でした。

今でもそうですが、当時も金というものは非常に高価で貴重なものでした。それを五つも作るのですから、ペリシテ人は大変な犠牲を払ったことになります。

（2）五人の領主が代表して

その五つという数字に関しても説明があります。ペリシテ人が住んでいた町の数が五つだったので、金の像も五つにした。大きな町だからとか、小さな村だからとかそんな区別はしない。とにかくペリシテ人の住んでいるありとあらゆるところを代表して、五人の領主が集まり、五つの金の腫物の像を作ることにしました。

金の腫物の像はねずみの形をしております。そのようなものを神にささげるということは、どうなのだろうと私たちは疑問に感じます。モーセの十戒の二番目に「あなたは自分のために、偶像を造ってはならない」とあるのを知っています。しかし前回も触れたことですが、神はこのことで特別にペリシテ人をとがめるようなことはしません。明らかにペリシテ人の罪は赦されていくのです。

ペリシテ人のしていることは、聖書の律法に照らせば確かに不完全なところはあります。でもそれで十分だというのです。形を守ることが大切なのではない。むしろ、あなたは本当に自分のしてきたことを悔やんでいるのか、悲しんでいるのか、心の深いところから残念に思っているのか。主は見えない私たちの心を常にご覧になっておられるのです。

神は、ペリシテ人が彼らなりに精一杯の努力をしながら悔い改めようとしていることをご覧になっておられます。

3　主の箱の中を見てしまう

18 節まで読みすすんできて、私たちはこれで問題は解決したと安心します。ところが 19 節に「主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた」と書かれているのを見て、意外な展開に驚きます。主の箱のふたを開け、その中を見たので、主が人々を打ったとあります。

主の箱の中を見ただけでどうして死ぬのか。民数記 4：19, 20 節にこうあるのです。

「彼らが最も聖なるものに近づくときにも、死なずに生きているようにせよ。アロンとその子らが、入って行き、彼らにおのおのの奉仕と、そのになうものとを指定しなければならない。彼らが入って行って、一目でも聖なるものを見て死なないためである。」

先ほども申し上げましたが、神の箱のこと

を扱えるのはレビ人だけと決められていました。そのレビ人でさえも、契約の箱という聖なるものに近づくときは、特別のマニュアルがあり、そのマニュアルに従わなければならない。もし、従わなければ死んでしまう。実際に従わなかったために何人も倒れています。

ベテ・シェメシュの人々がこのことを知らなかったのではありません。レビ人を呼んでいるのですから、ちゃんと知っているのです。箱の中に何が入っているのかも知っている。十戒を記した石の板二枚とアロンの杖、金の壺。それだけです。知っているけれど、見てはいけないと言われれば言われるほど見たくなる。神の命令に背こうとする罪の思いは、アダムとエバの時からいつの時代も変わることはありません。

中を覗いたとき、何か呪いのようなものがかかって死んだのではありません。聖なる方である神が語られた御言葉をあまりにも軽く扱い、背いた結果として自らの手で死を招いてしまったのです。

4　イスラエルの信仰

（1）何も犠牲を払わない

どうしてこんなことが起きてしまうのでしょう。イスラエルの人たちは全焼のいけにえをささげて信仰をきちんと現したのではなかったのか。

一つ一つ考えていきます。ベテ・シェメシュの人々が全焼のいけにえをささげた場面をにもう一度戻ります。彼らはいったい何をささげていたのか。まず最初にしたは、二頭の雌牛が引いてきた車をこわし、それを薪にしたことです。車は誰が用意したのか。ペリシテ人です。ペリシテ人が犠牲を払って用意したものをこわして薪にしました。

その次に彼らしたのは、二頭の雌牛を殺して全焼のいけにえにするということでした。二頭の雌牛を用意したのは誰ですか。ペリシテ人です。ペリシテ人が犠牲を払って用意したものをいけにえとしてささげました。

そしてもう一つ彼らがしたのは、金の腫物の像、すなわち金のねずみの像を契約の箱といっしょに石の上に置くということでした。主にささげたということです。その金の象は誰が用意したのか。これもペリシテ人です。ペリシテ人たちが犠牲を払って用意したものをただ石の上に置いただけです。

では、ベテ・シェメシュの人々は何か自分たちなりの犠牲を払って、神にささげたのか。15 節の最後に「その日、他のいけにえも主にささげた」とあって、彼らも別にいけにえをささげたかのように読めなくもありませんが、しかし元の文章を見ますと、彼らが何か別に用意してそれをささげたようには書かれていません。あくまでも、彼らがささげたのは、ペリシテ人が用意したものです。自分たちはほとんど何も犠牲を払っていない。そこに一つの問題があります。

（2）他の神々を拝んだまま

そしてもう一つの問題がある。7 章に入ってから明らかになっていきますが、イスラエルの人々は他の神々を公然と拝んでいたのです。神の契約の箱を大切に考えているようでいながら、その隣で仏壇を拝み、八百万の神々を拝んでいる。そんな状態でした。

そうしますと、先ほど彼らは全焼のいけにえをささげたとあるのですが、実にそれは形式的なものであったことになります。罪を悔いてささげていたのでもなければ、罪が赦さ

れたことを感謝してささげていたのでもない。

あのペリシテ人たちは、自分たちのしたことを後悔し、罪を赦されるために彼らなりに精一杯犠牲を払いました。ところが、ベテ・シェメシュの人々はそうではない。ある日思いがけなく棚ぼた式に契約の箱が戻ってきて、それを見て喜んでいるだけ。

ペリシテ人との戦いの時、彼らは何をしたのか。契約の箱を持ち出して来て、これがあれば戦争に勝てる。自分たちの都合のよいように神を利用していた。それがどれほどの罪であったのか、彼らは思い出したでしょうか。いいえ、まったく悔いている気配がない。

ですから、契約の箱の中を見ようとする不信仰な者たちが出てきても、何も不思議なことではなかった。むしろ起こるべくして起こったとも言えます。

5　イエス・キリスト

（1）神に近づけば死、神から離れても死

神のさばきがあったとき、ベテ・シェメシュの人々は言いました。「だれが、この聖なる神、主の前に立ちえよう。」

神がどれほどにきよいお方であって、私たちはその方の前に立つことができない。ベテ・シェメシュの人々は、失敗を犯して初めて、自分たちがいかに罪に汚れているかを自覚しました。

聖書には、聖なる神の臨在に触れるときに死を覚悟した信仰者が何人も登場します。たとえ預言者であろうともまばゆい光の中で罪の汚れだけが浮き上がってきて耐えられなくなるのです。

神のきよさに近づくことは死を意味します。しかしまた一方では、私たちは神から離れては生きられない存在であるとも言われています。神に近づいたら死んでしまう。さりとて離れても死んでしまう。いったい、どうしたらよいのでしょう。どう考えても、私たちには絶対に解決することができない問題です。

（2）神による解決

神がこの問題を引き受けてくださいました。どのようにされるのか。ペリシテ人は二頭の雌牛に神の契約の箱を引かせました。乳を飲ませていた子牛は牛小屋につながれていました。雌牛は子牛の方には向かいません。涙を流しながら、鳴きながら、ベテ・シェメシュの町を目指して歩み、そこで殺され、全焼のいけにえとなっていきました。

御子キリストが為されたみわざはまさにこの通りです。この方は、十字架の上で父なる神は切り離され、見捨てられたとき、涙を流されながら悲しみました。しかし、それでも十字架から降りようとはなさらない。父の方に戻ろうとされるのではなく、十字架におつきになるために、まっすぐに歩まれました。そして、十字架の上でご自分のからだを全焼のいけにえとしてささげてくださいました。恐ろしいほどの聖さに満ちた神である方が、このようにしてくださったということに驚きます。

ペリシテ人は、自分たちの罪を悔い、罪の償いとして精一杯のものをささげようとしました。今私たちは、罪を赦していただくために物とかお金とかそのようなものを差し出す必要はありません。神は私たちの心をご覧になるお方です。こんなみじめな人間です。こんなに汚れ果てた私です。私にはどうする

こともできない。そのような悔いた心を差し出すだけ。神はそのことだけを待っておられます。もし、私たちが悔いた心を差し出すことができるなら、神はそのことに報いるために十字架の犠牲もいとわないと言われます。

今朝ともに神の愛の深さと恵みを覚えたいと思います。